

思い出から 物語へ

自 営 業

桐 山 洋 平 (28 歳)

(ガネフォ会)

「ガネフォ」という言葉が私の頭に現れてくるたびに、若き水球の選手団を思い浮かべながら、次のようなことを考えてしまう。

「もし自分が選手たちと同じ境遇なら、あのような決断を下せただろうか。」

私が福岡での玄洋社の勉強会で知り合った、浦辺登氏からのご紹介で、ガネフォ会に参加させていただいた。初めての参加は2017年11月である。その時、私は26歳であった。なので、ガネフォに参加した当時の水球の選手団と年齢が重なっている。

選手団に選ばれた中には、会社勤めの人もいると聞いた。25、6歳の企業人と言えば、ようやく仕事を覚え始め、会社のエースになるべく、脇目も振らず猛烈に仕事をしている時期であろう。言い換えれば、厳しい出世レースの渦中である。自分自身と重ね合わせてみれば、やはり「将来」を考えて、ガネフォに参加するよりも仕事に専念したい気持ちもあっただろう。

さらにガネフォは政治がらみの色物案件である。政治がらみと言っても、舞台は日本国内を超えて、冷戦真っ只中の世界である。そして、政治の話になると、ここぞとばかりに大小様々な御意見番がどこからともなく現れてくる。さらに東京オリンピックを翌年に控えた日本は世論に敏感なタイミングでもあった。

ガネフォに参加を決めた選手たちの人生やその当時の社会状況に思いを馳せると、個人としても、社会としても、様々な葛藤や迷いや矛盾があったかと思う。しかし、幾多のジレンマに悩まされながらも、一本の筋を通すことができたのは、選手たち一人一人の中にある純粋さが発揮されたからではないだろうか。

少なくとも、今だけ、金だけ、自分だけ、のような利己的な自己愛好家には、そのような決断を下すことは難しい。事なかれ主義であれば、選手の参加要請の話を自分には無関係なものとして聞き流していたかもしれない。

私は、水球の選手団が懐かしみをもって語るガネフォの思い出から「人として大切な何か」を受け取ろうとしている。

村上順三氏から送っていただいた資料に目を通す。私に最も強い印象を与えたのが、「日本水連への脱退届け」である。1963年10月25日の新聞にこのように記されている。

「このほど私たちはインドネシア共和国から新興国競技大会に個人招待を受けました。われわれは日本の未来のため、またはスポーツを通じて世界親善のために役立つことと信じ、あくまで個人の資格で参加するつもりであります。つきましては日本水泳連盟には今後いっさいのご迷惑をおかけしないよう、ここに脱退届けを提出します。」（筆者が句点を一部追加）

この脱退届けを読んだ時に、私は身体に言葉にしづらい爽快さを身体に覚えた。それは、若さゆえの無条件の情熱が伝わったからであり、自ら宣言して、行動するという言動一致の美しさのためでもあった。選手団は「スポーツによる世界親善」を口で宣言しただけではなく、身体をもって示した。その行動は、百の美辞麗句よりも尊いものではないか。

ガネフォを懐かしむ選手には、自分たちを幕末の志士になぞらえる方もいた。日本水連の脱退は時代を超えた「脱藩」だったのかもしれない。その心は、小さな常識や枠組みに囚われずに、大きな志を抱き、挑戦することである。

私の感覚的なことで申し訳ないが、「先の戦争」を境に「戦前」と「戦後」で何か断絶があるような気がしてならない。もちろん時間的には連続しており、人間の営みは続いていた。歴史の本を読んでも、昔のことは頭では何となく分かったつもりになるが、身体的な手応えがない。

けれども、ガネフォのことを知り、ガネフォ会で当時の映像や資料を見せていただき、ガネフォを懐かしむ団欒の場に参加させていただいた。同じ場所で同じ空気を吸わせてもらったことで、時代の断絶の闇にかすかな道筋を見出すことができるようになった気がしている。

ガネフォを思い出せば、インドネシアと日本の友好のために燃えた水球選手団の若き姿が、「独立は一民族のものならず全人類のものなり」と語るインドネシア

建国の父・スカルノが、植民地支配に苦しむアジアの民のために立ち上がった志士たちが、一つの繋がった物語として私の前に現れてくる。

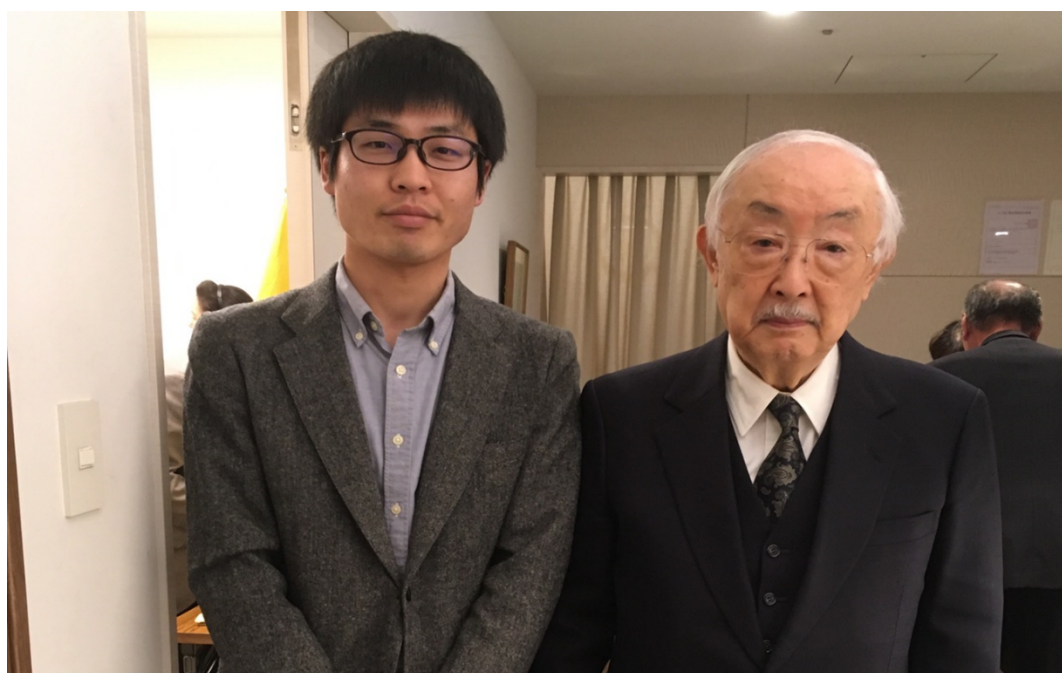
「もし自分が選手たちと同じ境遇なら、あのような決断を下せただろうか。」

私も似たような状況に遭遇したら、些細なことに囚われずに大きな方向に進んで行きたい。そのように行動することの正しさは、半世紀を経過してもなお当時を楽しげに語り合う選手団の方々の輝かしいあの笑顔が何よりの証拠である。

時代の末席にいる私としては、過去に学び、未来に向けて行動するのみである。

(最後に)

このたびはガネフォに関する一冊に寄稿する機会をいただき、心から嬉しく思います。私事で恐縮ですが、今年の夏から中国に留学いたします。中国は日本と政治体制も文化も違いますが、日本を背負う気概で勉強し、人間の器を広げてこようと思います。2017年のガネフォ会で頭山立國氏から「爺さんは『大学』にある『格物致知誠意正心修身治国平天下』の句をよく話をしていた。」というお話をいただいたことを鮮明に覚えています。私はまだ小人ではありますが、ガネフォ会の皆様から学んでいきたいと思っております。ガネフォ会の発展と皆様のご健康を心から祈念しております。



(私) 桐山洋平

頭山立國 氏

東京・有楽町 成城クラブ にて